

◎特別支援学校（肢体不自由）

重複障害のある生徒の言語活動を豊かにするICT等機器の活用と工夫
～多様な言語アプリを活用した国語科の実践～

1 教科等名及び学部・学年

- (1) 教科等名 国語科
- (2) 学部・学年 高等部1年、3年

2 単元のねらい及び計画

- (1) 単元名 「文章をつくろう」

(2) 単元のねらい

- ・単語でなく、文として言葉を意識することで、日常会話での意思表示や聞き取りの正確性が向上する。

(3) 単元計画

次 (配時)	主な学習活動	活用するICT等支援機器・ アプリ名等
一 (6)	<ul style="list-style-type: none">・アプリ「ひらがなたんご」やそれを真似た動詞フラッシュで語彙を増やす。・アプリ「DropTalk」で言葉を選択して二語文や三語文を作り、できた文章通りに実行する。・動画を見て、動画に合うように三語文を作る。	<ul style="list-style-type: none">・iPad、テレビ、コネクタ・アプリ「ひらがなたんご」・アプリ「Keynote」で作成したオリジナル動詞フラッシュ・アプリ「DropTalk」で作成した2×6のシート3枚（人物・対象物・動詞）
二 (5)	<ul style="list-style-type: none">・行事の振り返りとして、「だれが・なにを・どうする」を踏まえ感じたことを追加して作文する。	<ul style="list-style-type: none">・アプリ「DropTalk」で作成した2×6のシート（気持ち）

3 授業での活用実践

(1) 活用のねらい

- ・「だれが・なにを・どうする」のボタン（写真やイラスト）を見て、自分で選択して画面に触れることで三語文を組み立てる。
- ・生徒の意思表出に教師を極力介さないことで、自分で文を構成した実感を持つ。

(2) 生徒の実態

- ・高等部類型IV（領域・教科を合わせた指導を主とする教育課程）5名（男子4名、女子1名）
- ・どの生徒も内言語が豊かであり、簡単な問いかけには、発語やジェスチャーで答えることができる。
- ・文字に関しては、50音を完全に理解していないものの、名前など身の周りのひらがなや漢字を一つのシンボルとして記憶しており、複数の選択肢から正確に取ることができる。
- ・写真やイラストがあれば、意思表出はさらに豊かになる。また、他者への関心が高く、「誰かが何かをしている」という状況の解釈が得意である。

(3) ICT等支援機器の活用方法・工夫点

- ・下図のように、既知の写真やイラスト等で作ったボタン（押すと数秒の間拡大表示され、音声が出る）はどの生徒も明確に選択できた。



- ・アプリ内にはボタンに使う素材を作って保存できるので、授業内であっても、生徒の興味関心や理解度に合わせて即座に教材を入れ換えることができる。

(4) 活用の効果及び課題

- ・何を選んだかが周りの生徒にもわかりやすかったが、生徒自身で操作する工夫が足りなかった。

4 改善点

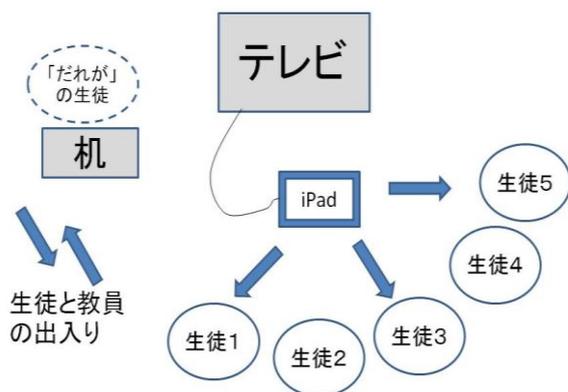
(1) 改善したこと

- ・AppleTVのミラーリングでケーブルレスにした。
- ・自分で操作できるように生徒の手を固定して押しやすくしたり、キーガードを製作したりした。

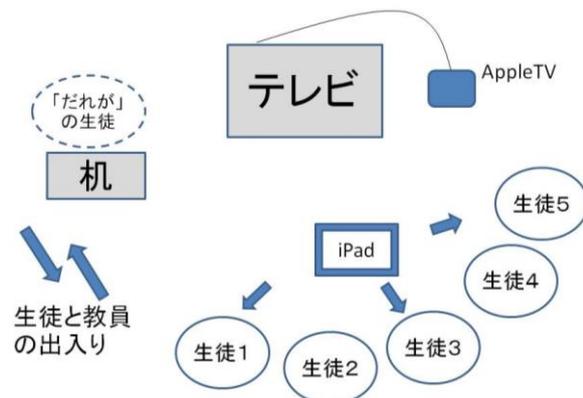
(2) 改善後の効果

- ・ケーブルがないことで、教師、生徒相互にとって優しい学習環境となった。

<改善前：煩雑な環境>



<改善後：iPadの持ち運びが簡単>



- ・指をバンドで巻くなどして固定すると、力を集中させることができ、若干押しやすくなった。バンドで固定することは、他の授業でも大いに活用できた。
- ・キーガードは、目的の位置まで何度も手を動かすことができる生徒には有効だが、本学習集団は、体調等により、腕の可動域が異なる生徒がほとんどのため、目立った改善にはつながらなかった。